

■追悼■

かけがえのない人生の父

——伊藤喜三郎先生を想う——

善光寺住職 黒田 武志

私と伊藤喜三郎先生が出会ったのは、昭和四

十一年のことです。伊藤先生は五十二歳、私は二十九歳でした。あれからもう、三十年以上の月日が流れたとは、なんだか信じられないような気持ちです。はじめてお会いしたときの印象から、ともに過ごし、そして育てていただいた日々の数多くの感動まですべて、つい昨日のことのようにはっきりと思い出すことができるの

ですから…。

私は全国托鉢行脚をすませ昭和三十八年より、大本山總持寺の特別僧堂に安居を致しました。昭和四十一年修行の一環として、同じく若い僧であった森山大行老師や林秀頼老師、平井大心老師、石附周行老師たち約二十名で、中外日報社の主催する、二十日間の「インド仏蹟巡拝の旅」に参加することになりました。その巡

拜団の一員として、伊藤先生が特別に入っておられたのです。

伊藤先生は世界的な建築家で、インドのデリーに、ハンセン病治療のためのセンターを設計され、そのセンターの竣工式に出席する目的でインドに向かうところでした。ふつう先生ほどの一流の芸術家であれば、ファーストクラスで一人静かに行けるものを、わざわざ若い修行僧たちに混ざって旅をしようと思ひ立つあたりが、まことに先生らしい気さくさであり、仏に対する謙虚さで、おかげで私は仏縁ともいふべきすばらしいご縁をいただくことになったのです。

知的で品のいいお顔にスマートな体、穏やかな口調……。イギリス紳士のような方だなあ、というのが私の第一印象でした。先生は、自ら世界的建築家であると名乗るような方ではありませんでした。何か、凡人とは違う斬新で鋭い感性をお持ちの方のようだと、一見するだけで

感じる事ができました。

私たち一団は、魂が清められるような多くのインド仏蹟を巡拝していきりましたが、先生は、片手にスケッチブックを持ち、いつ見ても何かをスケッチしていらっしやいました。とくに尼蓮禪河は、心ふるえるほどうまかったので、思ひ切って、

「先生は画家ですか」

とおたずねしたところ、

「いえ、建築家なんですが、絵も少々描いているのです」

と微笑んでおっしゃいました。これも伊藤先生の、決して奢ることのない謙虚さで、この頃は、何度も個展を開かれるほどの日本南画の大家の域に達しようとなさっていた方だったのです。それがわかるのもう少し後になるのですが。

私は先生に魅かれるものがあり、インドでは先生とともにさまざまなところを歩きました。





フツツカカ

1000

5~6世紀

ヒルロ人味の造り

1880年

英人が発見した仏像
は完全に後漢時代。

フツツカカ(南)は同加
模した石像



フツツカカ(カ中市内)

1000年 釈尊が坐した南の
ボツツカカ 1000年内 石像

(南)はボツツカカ5代目の
石像。

仏教美術の究極ともいわれる洞窟・アジャンタ、エローラでは、専門家も舌を巻くほどのすばらしい講義を個人的に受けることができました。また、骨董品の買物に出かけ、古美術に対する関心を引き出していただいたことは、私にとってこの上ない収穫となりました。二人で手に入れた世界一流のチベット曼陀羅をはじめ、私が古美術のコレクションをはじめめるきっかけをつくってくださったのも伊藤先生なのです。

インド仏蹟参拝旅行の帰り、石附師と私はタイのパクナムに一年の修行を致しました。その間も、又、タイから帰国後も伊藤先生との文通や交流は続き、昭和四十四年には、私の仲人をお引受いただきました。結婚にいたるまで、何度かのお見合いがありました。そのつど伊藤先生はついてきてくださり、まるで実の息子のことのように、横でハラハラしたり、安堵した

り……と一生懸命になってくださいました。

昭和五十九年には、善光寺開創十五周年を記念して、釈迦殿を建立いたしました。その設計を伊藤先生は快く引き受けくださいました。五十年先の仏教界はこうなっているだろうと伊藤先生が心に描く通りの設計をしていただきました。いとお願いしたのです。

「ゼロから出発した私が寺を持ち、発展させることができましたのも、み仏の導きとみなさまのお力添えのおかげ。十五周年を一つの節目として、釈迦殿をつくり、また、報恩として、海外に留学僧を派遣して人材の育成をはかり、世界の平和にいささかなりとも貢献したいと思うのですが……」

そういうと、先生は大きくうなずかれ、以後一番の賛同者となり推進者となってくださいました。そのとき、先生におっしゃっていた言葉は、いまでも私の心の財産として刻まれ

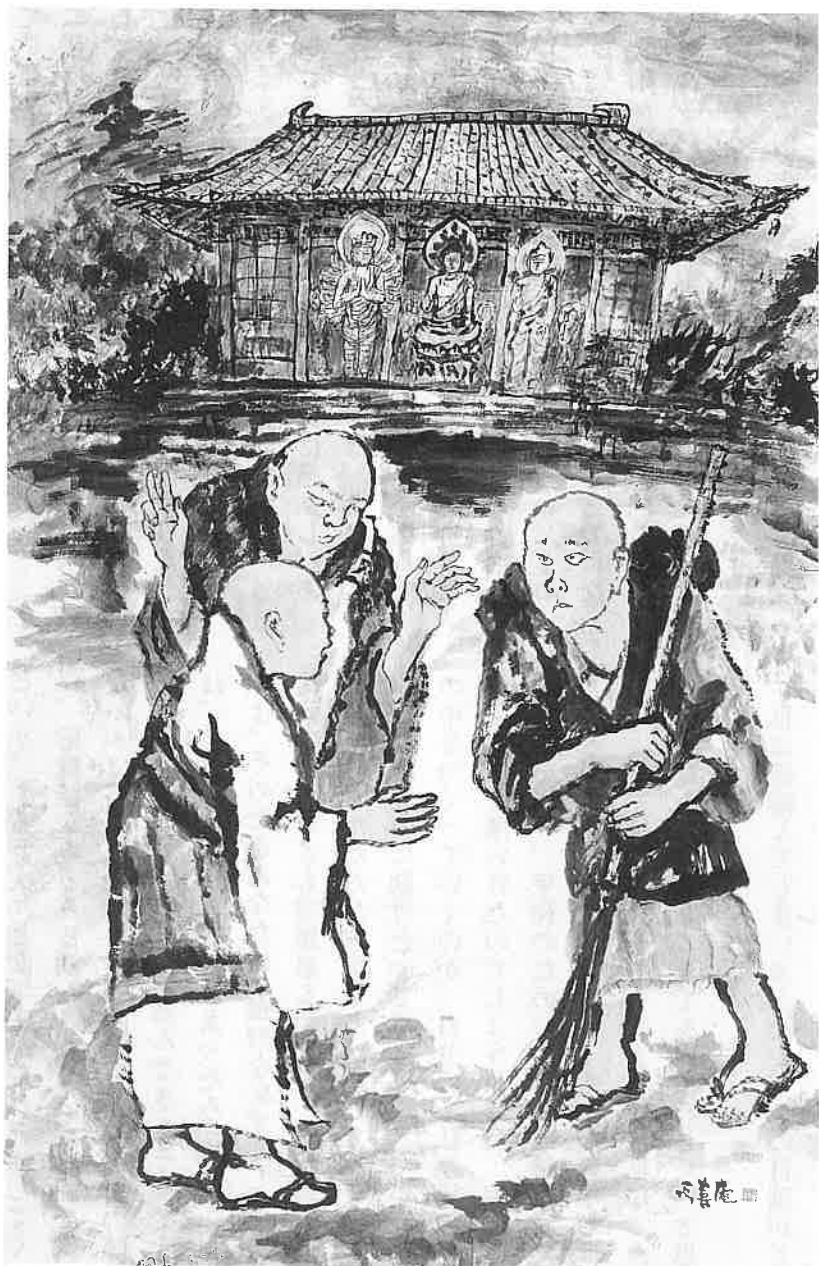
ています。

「私は、方丈さまの人生観・生き方に深く共感し、感銘を受けているんです。〃宗祖を通して釈尊に返れ〃という基本理念を修行時代から貫き通し、それを実行していくエネルギーには圧倒されます。

そもそも、私があなたの生き方に感動し、あなたと交流し続けたいと思ったのは、あの、若き日の全国托鉢行脚の話聞いたときからです。もとは電車の乗り間違いによって始まった托鉢行脚だったようですが、ポロポロの着物、すり切れた草履で何カ月も歩き続けるなど、いうのは簡単だが、誰でも実際でできることではない。雨が降り、雪が降り、金もなく、同じような若い子から冷たい眼で見られ、野宿を繰り返す…。ある雨の日、『般若心経』を唱えながら、女子校の前を歩いていたとき、ふと気づくと女学生がそばにいて、十円のご喜捨をくださった

という。すると次々と女学生が現れ喜捨してくれ、応量器がみるみる満たされて…。感謝で胸がいっぱいになったとき、雨が上がり、雲の隙間からサーッと陽が差し込んできたそうですね。どんなに美しい光景であつたらうと思いませんよ。そのときあなたは、強烈な恥ずかしさも、惨めさも、寒さも空腹感も超えた、〃無〃の境地になつて、ただただ感謝した。そして、こんなふうにお互いに助け合つて幸せになつていく世の中をつくつていくのが、自分の・仏教徒の使命であると悟られたのでしようね。今、海外へ留学僧を送り、平和のために生きる人材を育てたいと思うあなたの気持ちは、あの、青年日の真つ白で純粹な気持ちそのままだ。私にできることなら、どんなことでも力になりたいと思う」

私は恐縮してしまいましたが、この言葉がどれだけありがたく思えたかわかりません。



伊藤三喜庵先生絶筆

伊藤先生は、私の生き方に共感したといつてくださいましたが、実は私の方が、先生の生き方・考え方、そして数々の作品にいつも教えられ、育てられ、磨かれてきたのです。

伊藤先生は、穏やかで謙虚な中にも、最初に私が直感したように、斬新で大胆、そして鋭い切り口で二十一世紀を見通す眼力を備えておいでになる方でした。

そしてそれらをおとばで語るのではなく、「絵画」という手法で表現してこられたように思うのです。「伊藤三喜庵^{さんきあん}」という雅号によつて…。

伊藤先生は建築家として世界的に有名なことはもちろんですが、一方、お若い頃から絵画制作に対する情熱は人並みではありませんでした。ずっと油彩で洋画を描いておられました。四十歳代の終わり頃から墨絵に転向。以後、洋画手法を生かした独特なタッチ・思想の水墨画を精力的に描き注目され、新しい南画の開拓・

推進のリーダーとなられました。大胆な画面構成と緩急自在の筆致、高い精神性のある躍動感あふれる作品から、また、見ているだけで心がほのぼのとしてくる作品…。先生の作品に、私は満ち満ちる生命エネルギーを感じずにはいられないのです。たとえば、「古代スリランカ考証」という絵には、お経を手にした一人の現代女性があるか彼方を見つめ、その背景に古代のさまざまな生活状況が描かれています。現代と古代を融合させるダイナミックな発想もさることながら、描かれた人々の生き生きとした表情、祈るような表情：時代を問わず、人は言葉にならない領域―魂や、瞑想、祈り、感動、詠嘆、生命を持つて生きているんだよということを改めて感じさせてくれます。また、「怒れる神々」という絵には、思わずふるえがくるほどの恐ろしい形相の神々が描かれています。これも、現代人の精神の放浪・荒廃を悲しみ、物欲、金銭

欲にとらわれて心をないがしろにしていきそうな風潮を見通し、怒り、二十一世紀に向かつて、「もつと心を大事にしなさいよ！」という伊藤先生のメッセージがこめられているように思っています。『説法釈迦』や先生の描いた数多くの『観音さま』を前にすると、たとえ周りがどんなに騒がしかろうとも、作品と自分一人とが精神の交感―心の対話―ができ、まことに謙虚に心穏やかになれ、『生かされている自分』を感じる事ができる人も多いのではないのでしょうか。

時代の急激な流れに左右されず、普遍的な美・慈愛・心・祈りのこめられた伊藤先生の作品は、どんなにこれから時が変化しようとも、変わらず、未来に生きる人びとに、真の生き方を示唆してくれる、すばらしい遺産であると私は思います。

ありがたいことに、善光寺十五周年を記念して発行した季刊誌『成寿』もはや、二十七号を

迎えますが、発行当初から伊藤先生には、表紙の絵、本文中さし絵、題字をずっと描いていただき、全国の読者の方から絶賛をほくしました。この他、善光寺から出る出版物のポスター等すべて、伊藤先生にさし絵をお願いしているのです。お忙しい身だというのに、先生も『成寿』に描くことを、ご自分のライフワークとして楽しみにしてきたといってください、一度も休まずに続けてくださいました。いつか、これらの作品を集めて、伊藤三喜庵先生の『回顧展』を開くのが私の夢なのですが。

また、ライフワークといえば、読売新聞朝刊に毎日掲載された津本陽作の（ジョン万次郎の一生を描いた）『椿と花水木 万次郎の生涯』では、五百十一回連続でさし絵を描かれましたが、毎晩毎晩、作者の遅い原稿を待つて一瞬にしてテーマを読み取り描き仕上げるといふ日々はどれほどハードなものであったかと思われれます。

このとき先生は、七十歳代後半にさしかかっていたのですから、いったいあのスリムな体のどこに、それほどエネルギーがたくわえられるのかと驚嘆したものでありました。また二十歳以上年下の私が、「疲れた」などといっていている場合ではないと、教えられたりもしました。作家・津本陽氏は、伊藤先生のさし絵を、

「伊藤先生の墨絵には、お人柄があらわれるというのか、見る者は創造力を刺激され、画中の情景の中に包み込まれるような思いに誘われる。おだやかなうちに凜平とした風韻がにじみでている」

と評されています。まことにその通りで、とくに私など、無人島で喉が乾ききった万次郎が岩山の頂上にやつと古井戸をみつつけ、仏が恵んでくれた水だと思ひ手を合わせたという部分のさし絵として描かれた観音様の絵に、伊藤先生そのもののようなやさしさを感じます。そこに

は「なんまいだ、なんまいだ」と、温かい書き文字が記されているのです。

また、週間サンケイに連載された小池一夫作『乾いて候』では、みごとな時代考証のもとに、粹で洒脱な江戸の人びとや風景を描き続け、多くの絵画ファンを魅了しました。あのような表現方法は日本屈指……まさに天才的だと私は思います。先生の描く女性のみなふくよかで美しく、どれも私には、先生のお好きだった観音像に見えてまいります。小池一夫氏というのは、『子連れ狼』の原作者としても有名ですが、その小池氏は、

「伊藤三喜庵先生は、自分が大ファンだった柴田錬三郎先生に面差しが似ている」

とおっしゃっています。本当に、お年をめせばめすほど若々しく、ダンディな先生でありました。

こんなふうにマスコミの仕事も忙しい中で、

先生が時間をつくってくださり、ともにスリランカ旅行に行ったのはつい五年前の平成四年の秋のこと。お亡くなりになる四年前とは思えぬ、エネルギーシユな活動ぶりでした。

スリランカには、それまでに二名の留学僧を送っていたこともあって、よりスリランカとの親善友好を深める道を模索しようという訪問目的でした。空港に伊藤先生は奥さまといっしょに現れ、少し照れたように、

「家を離れるのは少しさみしい気がするねえといったら、家内が空港まで送ってきてくれたんですよ」

とおっしゃいました。本当にはたからみてもうらやましくなるほど、仲のよい、すばらしいご夫婦でいらっしゃいました。また、連載中のお仕事で忙しかったのでは？ とおたずねすると、

「十六、七枚描いておきましたよ。力を入れて

描いてきたから大丈夫ですよ」

とニコリと。日本人の男子の平均寿命をクリアした方とは思えぬ発言に驚かされたものです。スリランカでは遺跡を巡拝し、伊藤先生はその歴史的美術的価値に興味津々で、相変わらぬ精力的にスケッチをしておられました。また、知事、大臣、大統領も訪問しましたが、とくにエネルギー省大臣と、建築家でもある伊藤先生とは話がはずみ、スリランカの国策遂行上の問題点などについて意見交換をさかんになさっていました。また、スリランカ仏教界の大御所である大菩提会会長ヒテイガレー・パナティッサ大僧正が誕生パーティーに招いてくださったとき、客の中にパキスタン大使がおられました。伊藤先生を見るなり、

「お顔を存じ上げています。伊藤先生はかつてパキスタンの病院を設計され、長く滞在され大統領とも親しく、大統領室にお写真が飾られて



橫濱善寺
南無阿彌陀佛



三喜庵
印

ありますから」

とかけよつてきましたが、伊藤先生はこのときも謙虚な態度で、ていねいなご挨拶をされていました。〃実るほど 頭こぶを垂れる 稲穂かな〃
——まさに世界のどこへ行つても、伊藤先生はそのような方でした。

一方たいへんおもしろく楽しい一面もあり、昼は巨象が水を浴びている池のほとりのレストランで、夕食をとったときは、鮮やかに思い出されます。すばらしいスリランカ音楽を奏でる楽士が楽器をかきならし、歌いながら各テールをまわつてきましたが、伊藤先生はそれはお喜びになって、夢中でナプキン・ペーパーにその姿をスケッチしておられました。お酒も少し召し上がり、朗々とした美声で歌もうたわれ、健康的な頬の色、明るい笑顔……。お腹が痛くなるほど二人で笑いあったのに。まさか、あれが、伊藤先生との最後の大きな旅行になる

なんて、そのとき誰が想像できたことでしょう。

平成八年三月三日、夕刻。伊藤三喜庵こと伊藤喜三郎先生は八十二年の生涯を閉じられました。研ぎ澄まされた感性のアンテナで、仏からのメッセージをキャッチし、現代に生きる私たちに〃絵画〃という表現方法で伝え続けてくれた偉大な画家。そして、わが子のように私を想い、生きるに値する人生スタイルをその生き方によつて教え続け、私を育ててくれた、人生の父。

「絵というのは、八十歳からだよ」

そういつて、最後まで学ぶ心や情熱を失わなかった伊藤先生……お姿は見えなくなつても、先生の精神は私の心の中に生き続けています。